様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：８４６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２０３６８

研究課題名（和文）甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究

研究課題名（英文）The research on the relationships between the background and the treatment of the relics based on the reconstraction of the chronology of iron armor and helmet

研究代表者
川畑　純（KAWAHATA, Jun）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：６０６２０９１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：古墳時代の鉄製甲冑の製作順序を検討し、組み合わせを分析することで、１２段階の変遷として整理した。その変遷をもとに甲冑の出土事例を検討した結果、より古い甲冑が重要視され、より優れた甲冑が被葬者の近くに置かれる傾向が明らかになった。これらから、古墳時代には有力者から授受される甲冑は古い方が重要であり、その背景には継続的な関係維持よりも最初の関係創出が重要視されていたことが考えられる。

研究成果の概要（英文）：I considered the typological chronology of armors in the kofun period.Then I analyzed the settlement of these armors and divided them into 12 phases.Analyzing the situations of arrangement of armors through these chronology, it was become clear that the older armor had been regarded to be more excellent than new one, and the superior armor had been put near the body. From such tendency, in kofun period it was thought that older armor was more important than new one and the creation of the relationship was emphasized than the maintenance of it.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　古墳時代　武器　甲冑

１．研究開始当初の背景

古墳の副葬品中には、型式学的な編年研究に基づけば、様々な時期に製作されたと考えられるものがまとめて副葬されたとみられる事例が存在する。具体的にはいわゆる「伝世鏡」とよばれるような、世代をまたがるほどの古い時期に製作された銅鏡と、被葬者が活躍した時期に製作されたより新しい銅鏡とが共伴して出土するような事例や、４世紀の古墳である奈良県東大寺山古墳から出土した「中平」銘の大刀などである。こうした様々な時期に製作された器物がそれぞれどのように認識され、扱われていたのかを考えることは、古墳時代の人々にとって器物の「履歴」の違いや「伝統」といったものがどのような意味を持っていたのかを考えるうえで重要である。

古墳副葬品に対する詳細な型式学的は、一括資料として出土する古墳副葬品の中にそうした製作時期が異なるものが存在することを明らかにしてきた。しかし、型式学的な編年研究の成果がそうした「モノの履歴」を考える方向へと向けられたことは、先述の銅鏡研究を除けばほとんどなかったといえる。「モノの履歴」とその位置づけとの関係性を考える事は、古墳時代における「モノ」の社会的な意義や機能を考えるうえで重要な論点ということができ、今後古墳研究ひいては古墳時代研究を進めるうえで注目する必要がある。

２．研究の目的

上記の現状に対して、「モノの履歴」の違いとその「扱い」の違いを分析し、考察を進める必要がある。ただし、そうした分析が進展していなかった背景として、古墳副葬品の型式学的な分析が大いに進展した今日においても、「伝世」や「製作時期差」を認識できるほどに詳細で妥当性の高い分析が可能な器物は決して多くなかった点が挙げられる。翻って考えれば、高い妥当性をもって「製作時期差」を認識できるほどの詳細な型式学的な変遷観・製作順序の想定が達成できるならば、上記の問題について分析が可能といえる。そこで本研究では、古墳副葬品のうちでも特に複雑な構造を持ち、出土点数が比較的多い資料である古墳時代中期の鉄製甲冑に注目し、詳細な型式学的変遷観を明らかにすることで、こうした課題への接近を試みた。

古墳時代中期の鉄製甲冑は主として短甲・冑・頸甲という三つの部位からなり、各部位で詳細な型式学的な分析が可能であるだけでなく、それぞれの組み合わせ関係を検討することが可能である。また、２点以上といった複数の甲冑が共伴する例もあり、それぞれの型式学的な製作順序の比較検討から、「モノの履歴」と副葬時の配置箇所や組み合わせの優劣といった「扱い」の違いを検討することができる。そのため、上記の課題を検討するうえで、現状で最も適した資料ということができる。

このことから、本研究では「モノの履歴」と「扱い」との関係を検討するために、基礎的な作業前提として、まずはじめに古墳時代中期の短甲・頸甲・衝角付冑・眉庇付冑といった鉄製甲冑の諸部位の型式学的変遷観を明らかにすることを目的として設定した。そして次に、そうして得られた変遷観に基づき、副葬時の組み合わせ関係の優劣（頸甲や冑といった付属具を具備するなどセットとして優れているか劣っているか、甲冑の位置部位を金銅装とするかどうかなどの点で優劣の差があるのか）と、副葬時の扱いの違い（被葬者に近い位置に配置されているかどうか、その他何らかの特別な扱いがみられるかどうか）を、甲冑の製作・入手順序（型式学的に古いものが上記の点から特殊な扱いを受けているような状況があるのかどうか）との関係から分析することを目的とした。

３．研究の方法

まず第一に、古墳時代中期を中心とする鉄製甲冑のうち、主要な部位である短甲の変遷観を明らかにした。革綴短甲については、これまでに注目されてこなかった要素である、裾板・帯金の分割比が製作時期の新古関係を表す要素であることを明らかにした。また、そうした裾板・帯金の分割比の変遷と、短甲の地板の配置方式が良好に対応することを示し、地板の配置方式も編年指標として参照できることを明らかにした。おもにこれら二つの要素から革綴短甲の変遷が明らかにできることを示し、地板角部の調整状況といった要素なども勘案することで、古墳時代中期の革綴短甲を４段階に編年した。

続いて甲冑のいち部位である頸甲について、その分類視点を再整理した。部材となる鉄板の連続的な形態変化と引合板の変形によって達成される頸甲全体形状の変化の原理を明らかにし、人体の形態に合わせた形へと変化する頸甲の変遷観の様相を明示した。また、そうした変化に伴って肩甲が人体に当たるようになるという問題点が発生する点を解決するために襟部が伸長すると理解し、襟部の伸長もまた頸甲の全体形状の変遷と整合的に変化する点を明らかにした。これらの様相と革綴技法から鋲留技法への変化という視点を合わせることで、頸甲をおおむね６段階に編年した。

以上の革綴短甲の変遷・頸甲の変遷に加えて、鋲留短甲についても各要素を再整理し、７段階に編年した。それに加えて、これまでに明らかにしていた衝角付冑・眉庇付冑の変遷観と合わせて、出土時の組み合わせをもとにそれぞれが整合的に変化することを示した。その上で、古墳時代前期から中期にかけての鉄製甲冑の変遷は１２段階に整理できることを論じ、個々の資料をその変遷内に位置づけた。

以上の甲冑の１２段階編年に基づき、一括

資料として複数の甲冑が出土した場合の「履歴」と「扱い」の関係を検討した。

４．研究成果

２点以上の甲冑が出土した古墳について、「甲冑の編年的位置づけ」と「セットや金銅装の有無にみる優劣」、「副葬時の配置位置」の関係を検討することで、古墳時代中期を中心とする鉄製甲冑の「履歴」と「扱い」について分析をおこなった。それにより、おおよそ次の４点に集約できる様相があることが明らかになった。

（１）近接古相：２点以上の甲冑が副葬される場合、被葬者により近い位置に古相の甲冑が、より離れた位置に新しい甲冑が配置される。

（２）古相優勢：２点以上の甲冑が副葬される場合、より古相の甲冑の方が頸甲や冑といった付属具の具備状況や金銅装の有無でより優れている。

（３）近接優勢：２点以上の甲冑が副葬される場合、被葬者により近い位置に配置される甲冑の方が頸甲や冑といった付属具の具備状況や金銅装の有無の点でより優れている。

（４）頭位優勢から足位優勢への変化：中期前半までは被葬者の頭側に頸甲や冑の具備状況や金銅装の有無の点でより優れた甲冑が配置されるが、中期後半には被葬者の足側により優れた甲冑が配置される。

以上の４点より導き出される解釈は、次のようになる。

まず第一に２点以上の甲冑が副葬される場合、それらは同時に被葬者のもとにもたらされたのではなく、複数段階にまたがってもたらされたものと考えられる。なぜならば、甲冑の新古関係と扱いには上記にみたようなさまざまな相関関係があり、甲冑の新古関係が認識されたままで保有され続け副葬されたと考えられるためである。そうした履歴の差が認識され続けるためには、古いものは早く、新しいものは遅れて入手されるような形を想定するのが最も妥当といえる。

第二に、そうした複数回に渡る甲冑の授受に際して、生産者・（被葬者・）葬送行為執行者ともに古相の甲冑を最も重視しており、そうした論理が甲冑の生産から副葬の場にまで貫徹していたと考えられる。古墳時代においては器物の授受は、モノのやりとりによって媒介される有力者間関係の構築を意味するものと考える。そのように考えた場合、器物の配布者側・受領者側双方にとって最も重要なのは、器物の授受によって媒介される関係の創出（最初の甲冑の授受）だったのであり、それに比べれば継続的な関係性の更新（新相の甲冑の授受）はやや評価付けが低かったとみられる。

こうした事象は、これまでの副葬品研究において「最終的に副葬された副葬品総体」を古墳の評価づけの根拠として、そこに優劣を見出すような分析視角対して新たな視点を導入するものである。また、武器・武具研究においては現代的な感覚から最新相の武器がより重視されたとの解釈もあるが、そうした理解は本研究の結論からは成り立たないといえる。むしろ銅鏡などと同じく古相のものが重視されている可能性が高まったことで、銅鏡や武器といった器物の機能の違いを越えた、古墳時代における器物の価値づけの論理の一端が明らかになったと考えうる。

本研究の分析は鉄製甲冑のみに限定したものであるが、そこから明らかになった様相は、今後古墳副葬品をいかに「読み解くか」について新たな視点を生み出したものと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

１．<u>川畑　純</u>　2014　「古墳時代中期における甲冑の配布と入手の一様相」『古代武器研究』vol.10　pp.15-26　（査読なし）

〔学会発表〕（計１件）

１．<u>川畑　純</u>　2014　「古墳時代中期における甲冑の配布と入手の一様相」第 10 回古代武器研究会　2014 年３月１日　於：山口大学（山口県山口市）

〔図書〕（計２件）

１．<u>川畑　純</u>　2016　『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究』　平成 24～27 年度科学研究費研究成果報告書　74 頁

２．<u>川畑　純</u>　2015　『武具が語る古代史古墳時代社会の構造転換』プリミエコレクション 60　京都大学学術出版会　355 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
川畑　純（KAWAHATA Jun）
独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所　都城発掘調査部・研究員
研究者番号：60620911

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：